

# おらほの病院

115

「あたたかな医療をめざして」

諏訪中央病院 リレーコラム

2040年、今から約15年後を想定した「新たな地域医療構想」は人口減少および生産年齢人口の減少を背景としています。日本全体が進められる構想です。しかし地域が置かれている状況や人口減少のスピードなどは地域によって異なります。それぞれの地域で自分たちの置かれている状況を把握し、未来へ向けての構想と実行を進めていく必要があります。諏訪二次医療圏（諏訪地域6市町村）の人口は現在約18万5千人、2040年には16万人になる見込みです。医療に関していえば、2020年までに外来患者数や手術対象患者数はすでにピークを迎えており、2035年には入院患者数、救急搬送件数もピークを迎えます。急性期医療だけを念頭に置けばすでにそのピークを越えているものと考えられるのです。一方で在宅診療を必要とする患者さんは2040年まで増加の一途をたどります。

## 諏訪中央病院

院長 佐藤 泰吾



佐藤 泰吾

(さとう・たいご)

院長。平成12年〜16年舞鶴市民病院内科および舞鶴市民病院付属加佐診療所、平成17年〜令和2年諏訪中央病院内科／総合診療部、令和3年〜5年国保依田窪病院勤務を経て、令和6年4月より現職。

# 「新たな地域医療構想」が動き出しています。

このような医療需要の変化を念頭に置きながら未来を構想する必要があります。

これから日本全国で医療機関機能に注目しながら、連携・再編・集約化などが検討されます。各医療機関は大きく3つの機能に分化していきます。3つの機能とは①急性期拠点機能、②高齢者救急・地域急性期機能、そして③在宅医療等連携機能です。

「新たな地域医療構想」を照らしながら、現場から時代が抱える課題を解決するための具体的な方法を示し、この社会が

えた病院機能です。在宅医療等連携機能とは、在宅で生活する患者さんを訪問診療や入院が必要な状況で快く引き受け、自宅での療養生活を積極的にサポートする病院機能です。諏訪地域の病院もそれぞれが、どのような役割を担うべきかを明確にすることを求められます。

昨年提示した構想の続編として、「八ヶ岳西南麓地域医療構想2026」を諏訪中央病院ホームページ上に提示させていただきます。

住民の生活を守ることが私達の最も大切な使命です。大切なことを守り続けながらも、変化を恐れてはならないと考えています。未来の住民生活を守るために私達は変わることができるか、そのことを問われる1年間になると考えています。本年度も皆様方のご支援とご協力をよろしくお願い申し上げます。

### 八ヶ岳西南麓地域医療構想



2026



2025

次回は5月3日掲載予定  
(題字は鎌田實名誉院長)